

---

# 果ての湿原

真縞 夜美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

果ての湿原

### 【Nコード】

N4699Z

### 【作者名】

真縞 夜美

### 【あらすじ】

世界の何処か、『果ての湿原』に辿り着いた「僕」。  
自分が誰か、ここは何処か、何故この場所へ来たのか。「僕」は何も知らない。

世界の何処か、終わりと始まりの場所、『果ての湿原』。

そこに住まうのは風変わりな人々と、奇妙な動物たち。

そんな者たちと、記憶を持たない「僕」の緩慢な日々が始まる。

何かを失った者たちの、終わりと始まりの物語。

## 獣医と紅鶴

世界の果てというのは、纏わりつくような寂しさを持っている。

その場所の第一印象はそれだった。

歩き続けて、一体どれくらい経った頃か。数ヶ月か、若しくは何年もかかったのかもしれない。この場所、一面に広がる湿原に辿りついた時、僕の旅は終わった、というか一つの終焉を迎えたのだと感じた。

薄灰色の曇天、辺りには薄い靄が立ち込めているせいで、遠くまで見通す事は出来ない。しかし所々に木製の家が建っているのが見える。高床式だ。家々を繋ぐ通路も同じく、人が二人程通れるほどの橋になっている。辺りには人の姿は見られず、気配すら感じられない。

地味で陰気な風景だった。

じつとりとした空気。濃い水の匂いが充満していた。

取り敢えず、歩こうか。

そんな軽い気持ちで橋に足をかける。

ぎし、と微かに軋んだような気がした。靴裏に張り付いて来るようなしつとりとした感触。どこまでも粘着質で、そして余所余所しい場所だ。

少し歩くと、一階建ての小屋のような家に辿りつく。橋に隣接するように、テラスが付いている。

なんとなく人の気配を感じて、ひょいとテラスを覗き込む。

案の定、そこには人が居た。

色の褪せたオーバーオール。まず目に入ったのはそれだった。順に僕の目が確認して行く。手には煙の立つパイプ、ごっそりと生えた灰色の髭。その下に隠れるように見える頬骨。若いとは言えない、あまりはりの無い皮膚。

「よお」

テラスの手すりに寄り掛かるように立っているその人物を、斜め後方から眺めていると、掠れた低い声が髭の下から発せられた。

「こんにちは」

声を掛けられたようだ。僕も挨拶を返す。

「新入りかい」

「さあ。今着いたばかりなので」

「それじゃあ、新入りだな」

くるりと振り向くオーバーオール。両肘を手すりに掛けたまま、こつちへ来いとも言つうように手招きをする。

「はあ」

気の無い返事をしながら、テラスへと続く橋を渡り、オーバーオールの前に立った。

「ようこそ、果ての湿原へ」

彼はにこりともせずそう言った。無表情だ。顔半分を覆う髭のせいでそう思うのかもしれないけど。

「見たところ、まだ若いようだな」

「まあ、それなりには」

「成人か」

「どの国のどの時代の概念で言う成人かは測りかねますけど、取り敢えず二十歳未満だと思います」

「男か、女か」

「見ての通り、男です」

「十代、男。なるほど」

何に納得したのかは全く解らないけど、オーバーオールは質問を止め、パイプをふかす。

結構背が高いな。僕は少し顔を上げて彼を見つめた。相変わらず表情が読めない。もしかしたら、どんよりと濁った灰色の瞳のせいかもしれない。

「道を進めば、いくつか空き小屋がある。好きな場所を使うといい」

「どうも」

「ふむ」

橋の上で寝る心配は無くなったな。そう思っていると、オーバーオールが髭を触りながら首を傾げた。

「何も訊かんのか」

「はあ、まあ」

その言葉の意図が解らず、曖昧な返事を返してみる。

「この小屋は一番湿原の入口に近い。だからやって来る者の中には、私を質問攻めにする者も多い」

「そうですか。大変ですね」

「場所による必然性だ。別に苦ではない」

「なるほど」

また会話が途切れる。

「私は獣医だ」

「そうですか」

唐突にオーバーオール改め、獣医が言う。

「あれを見る」

促されるままに、獣医の指さす方向を見る。

鮮やかな桃色の体。小さな沼のようなそこには、一羽のフラミンゴがポツンと立っていた。

「どう見える」

「フラミンゴに見えますね」

「よく見ている」

肯定も否定もされずそう言われ、取り敢えずじっとフラミンゴを見つめる。

普通のフラミンゴのように見える。片足ではなく、両足で立っていることを除けば。細い足。まるで葦のようだ。

言われた通り、フラミンゴを見つめ続けていると、ふと鼻に奇妙な臭いが掠った。

果物が腐ったような、甘いのか臭いのかわからない曖昧な臭い。

すると突然、フラミンゴの細長い首が、根本からポトリと落ちた。軽い水音と共に、それは直ぐに沈んでいく。そして楕円のような体の部分が見る見るうちに炎に包まれた。

「燃えていますね」

「ああ。もう少しだ、見ている」

そんな会話をしている内に、直ぐにフラミンゴの体は燃え尽きてしまった。

二本の葦のような足だけを残して。

「これで終わりだ」

「はあ」

それがなんだと言うのだろう。剥製か生き物かどうかも怪しかったが、二本足で立つフラミンゴの首が落ち、体が燃え、足が残った。ただそれだけのことが。

「あそこから花が咲くんだ」

「花、ですか」

「ああ。治療してな、花が咲くようにしたんだよ」  
「なるほど」

花が咲くという意味が残る訳か。意味があるのであれば、それでいい。取り敢えずは納得できる。

「驚かんな」

「まあ、全く驚かなかったと言えば嘘ですけど。フラミンゴから花が咲くんですね」

「ここではな」

獣医が再びパイプをふかした。

「色が少ないだろう。ここは」

「そうですね」

確かに辺りにはほとんど色のない景色が広がっていた。薄い暗緑の草、灰色の空、薄茶の小屋。獣医のオーバーオールは、本来青のデニム素材だったようだが、今ではもう白っぽい灰青に近い。

「だから花が咲けばいいと思ってな。ここはほとんど苔しかないが、

動物は何種類か居る。そいつらを治療して、花にするんだ」

「ああ。それで獣医ですか」

「そうだ」

先程まで居たフラミンゴ以外は何の生物も見当たらないが、きつと見えないだけで、他にも居るのだろう。この初老の男は、生気のない見た目の割に、なかなか生産的な事をするのだなと思った。

「ここでは色々な人間が、思い思いの事をしている。気が済むまでな」

獣医が白い煙を吐く。

「お前さんは何をする」

「さあ。決めていませんね」

別にこの湿原を目的地としていたわけではないけど、歩き続けたら辿りついた。ただ、それだけだったのだ。ただ歩き続けて、色々なことを忘れてしまった。何故僕は歩き出して、歩き続けて、忘れしまったのか。それさえも思い出せない。

思い出そうとすると、頭の中に靄がかかる。まさにこの景色のように。

多分、何もかも捨てて来たんだろう。記憶も、過去でさえも。持っているのは、名前くらいだ。

「ここは果ての湿原。終わりと始まりの場所だ。お前さんの思うようにすればいい。留まるも去るもな」

「ええ。そうですね」

取り敢えず僕はここに留まるだろう。なんとなくそう思った。行く場所もない、戻る場所もない。だから、取り敢えず、だ。

フラミンゴの残した二本の足を見る。

花が咲くのは付け根の部分が、大きな節のような関節部分だろうか。ぼんやりとそんなことを思った。



## 酒場と金魚

うつすらとかかる白い靄に、どんよりと濁った薄灰の空。生温かい湿った空気。

果ての湿原の風景は、今日も清々しい程に陰気で優しい。

特に目的も予定もない僕は、取り敢えず《渡り橋》を当てもなく歩いていた。

初めてここへやってきた日に出会った獣医。彼がこの湿原中に張り巡らせられているこの橋を渡り橋というのだ、と教えてくれた。そのまんまの名だと思った。

この渡り橋はどこにでも、どこまでも続いている。

橋が途切れたのかと思ったら、まだ先がある。何もないのかと思ったら、靄の中から小屋や奇妙な動物が姿を現す。靄で見通しが悪い。そのせいで、この湿原がどこまで広がっているのか全く見当がつかなかった。

どこまで続いているのか確かめてみるのも良いかもしれない。なんて思った。

ぎしぎしと小さく軋みながら、それでいて壊れる様子など一向にない橋を靴裏に感じながら歩いていると、前方に他の小屋よりやや大きめの建物が見えて来た。

足を速めることもなく、一定のペースを保ち続けながら、その建物の前に辿りつく。

僕の仮住処である、大人三人が寝そべれるくらいの広さしか持たない物置小屋を、六つ程合わせたような大きさ。両開きのドアの上には、文字の掠れた看板がかけてあった。

《ゴールドフィッシュ》

何の飾気もない板の上に、黒い文字でそう書かれていた。

ゴールドフィッシュ、金魚だ。ただ、それだけ。

特に何の感想も抱けない。

ゴールドフィッシュという掠れた文字を見つめる。暫くして、なんとなくそれに飽きると、僕は右側の扉を押して中へと入った。  
「いらっしやい」

室内に足を踏み入れると、カランという乾いた鐘の音と共に、歓迎の言葉が耳に入って来た。

まず目に入ったのは木製の丸テーブルの席が二つ。そして簡素なカウンター席。声の主はその中に居た。

「あら、初めて見る顔ね。新入りさん？」

若い女性だった。淡い銀髪を高い位置で結っている。前髪は横に流し、ほつれ髪が白い頬にかかっている。目尻の垂れた大きな瞳と、その右下にある泣き黒子が印象的だ。

「はい、一応。初めまして」

「ええ、初めまして」

女性はにこりと微笑んだ。

「どうぞ、座って」

そう勧められ、彼女の目の前の席に腰を下ろした。

あまり明るいと言えない店内を、ぐるりと見回してみる。

奥の席に人が二人程居た。二人ともグラスを片手に、俯いている。

「ここは、酒場よ。飲んでいく？」

なるほど、酒場か。活気や喧騒とは縁のなさそうな場所だ。

「何があるんですか」

「あるのは、一つだけ。《金魚の涙》よ」

酒の名だろうか。なかなか変わった名だ。女性は口元に微笑みを湛えたまま、こちらを見ている。

そう言えば、人の表情を見るのは久しぶりかもしれない。

果ての湿原へ辿りつくまでの道中、誰かに会ったという記憶はほとんどないし、入口付近で会った獣医も無表情な人物だった。

だからなのか、微笑む女性を見ると、何だか奇妙な気分になった。

「酒ですか」

「いいえ。でも飲めば、気持ちよく酔えるわ。飲む？」

柔らかな笑み。透き通るような紫の瞳。

それに惑わされてしまったのか、僕は気付くと頷いていた。

「ちよつと、待ってね」

女性は奥の部屋に引つ込むと、グラスとスープ皿を持って直ぐに戻って来た。

「これが、金魚の涙」

カウンターにことりとグラスを置く。

「これは、涙の受け皿よ」

そして薄く水の張ったスープ皿を置いた。

「これは、何のために？」

グラスはわかるが、スープ皿の用途は不明だった。彼女の言葉から、飲むものではない事だけは確かなようだ。

「ここにね、涙を落とすの。飲んでみて。飲めば、わかるわ」

なるほど、飲めばわかるのか。飲まない理由は特に無い。僕はグラスをとった。

グラス七分目程までに注がれた、透き通った液体。微かに色が付いている。琥珀色、だろうか。鼻を近づける。酒ではないという彼女の言葉の通り、アルコールも入っていないようだ。香りも無かった。

彼女の穏やかな笑みに見守られながら、唇にグラスを付け、傾けた。

冷たい液体が口内を満たし、喉へと流れて行った。何の味かはよくわからなかったが、仄かに甘かった。

体内に入って尚、液体は冷たかった。胃に落ちる感触。じわりと体に染み込んで来る。

すると突然、奇妙な感覚が右の頬を伝った。そして、ぽとり、という小さな水音。

下を見ると、スープ皿にはられた水面に、波紋が出来ていた。

まさか、と思い手で頬を触ってみる。指先に触れたのは、目尻から顎にかけて、一筋の濡れた跡。

涙が伝った跡だった。

「素敵ね」

女性がぽつりと呟く。

「綺麗な、涙」

カウンターに両肘をつく。

「泣く、素晴らしいことだわ」

そして手の指を組み、そこに顎を乗せた。

「僕は泣いたつもりはありませんよ、一応」

何と反応すべきか判然としなかったが、取り敢えず否定してみる。泣いたのではなく、目から体液が滲み出ただけだ。まあ、それを一般的には泣く、というのかも知れないけど。

「そうね。スープ皿はどう？」

彼女は肯定とも否定ともつかぬ言葉を呟き、次はスープ皿を気にした。彼女の視線が僕の頬からスープ皿へと移る。

僕もつられて中を覗く。

しかし、そこには波紋の余韻が残るだけだった。

「特に、何もありませんね」

「あら、ほんと……」

微笑み一つだけだった彼女の表情が少しだけ揺れた。

「不思議ね……、もう一口、飲んでみて」

彼女に促されるままに、僕はもう一口金魚の涙を飲む。今度は左目から涙が流れ、そのままスープ皿へと落ちて行った。

「今度は、どうかしら？」

揃ってスープ皿を見つめる。

微かに揺れる水面に、僕と彼女の顔が半分ずつ映っている。

今度もまた、特に何も変化がないように思えた。が、違った。水が徐々に色を変え始める。透明から、やや透き通った乳白色へ、そこに淀みが生じたかと思うと、少し濁った灰色へと、それで

終わりだった。

「あら……？」

彼女の首が少し傾いて、

「気持ちよく、酔えた？」

僕にそう訊ねた。

「いえ、特には」

彼女の言う、酔うという感覚がどういったものを指すのかは判然としなかった。だが金魚の涙を飲む前と飲んだ後、特に何かが変わったという感覚も無かった。

沈黙が漂う。

僕は微笑みながら思案する彼女の顔を見つめていた。

ほっそりとした頬に、ほっそりとした指を当てて、考えている。

グラス、皿、天井、店の何処か。視線の行く先がいくつか変わった後、最終的に僕の瞳へと到着した。

「わかったわ」

「何がです」

今度は少し嬉しそうに微笑み。

「あなたに足りないもの。思い出ね」

「はあ、まあ」

肯定とも否定ともつかない返事をする。足りないのかどうかは知らないけど、記憶がないから、当然思い出も無い。

「だから、何も映らないのね。残念」

ほう、と溜息をつく彼女。

「思い出があると何が映るんですか」

僕は訊ねる。

「思い出よ」

「思い出、ですか」

「ええ、そう。金魚の涙を飲んだ人はね、涙を流すの。涙は思い出を映す欠片。それがお皿に落ちた時、その人の思い出が見えるのよ」  
「なるほど」

だから僕の皿には何も映らなかった訳か。

「あその人達もね、そうやって今、思い出に浸っているのよ。羨ましいわ」

彼女は酒場の隅に座る二人を見遣る。

「あなたは、見えないんですか」

視線をちらりとそちらに向けながら、僕は訊ねた。

「ええ、そう。見ていてね」

そう言って、彼女は僕の飲みかけのグラスをとり、一息に飲み干した。

一秒、三秒、五秒、七秒。十秒を数えたところでも、彼女の紫色の瞳から、涙が零れる事は無かった。

「ね、泣けないの。私」

泣けない。なるほど、僕が金魚の涙を飲んだ時は、恐らく二秒程で涙が出た。そんな速効性があるにもかかわらず、涙が出て来ないと言うのは、そういうことなのだろう。

「それでは、見られませんね」

「ええ、そうなの」

彼女は微笑みながら物憂げな溜息をついて見せた。

「金魚は作られた魚。人は金魚を観賞し、金魚は人を観賞する。金魚はいつでも見えているわ。そして此処へ来た時、涙を流すの。もう見られない時、見れない時を思っ、感傷に浸るの。その想いが思い出を映すのよ」

「なるほど」

「私も浸かりたい。あの人たちみたいに、どっぷりと思い出に吞まれない。でも出来ないの」

「泣けないから」

「そう、泣けないから」

彼女は持っていたグラスをことりと置いた。中は空だった。

「せっかく金魚を見つけたのに、皮肉よね」

「そうですね」

「ここへ来る人たちは、何かが、何処かが欠けてる。私は泣くこと」  
気のせいかな、そう言った彼女の姿は少し残念そうに見えた。

「泣きたいんですか」

「いいえ。泣きたくないから、捨てたの。あなたも、そうなんですよ」

僕は答えなかった。というか、答えられなかった。

だって、何も覚えていないから。

記憶がないのは、僕がそう自ら望んだから。そうだとも言えるし、そうではないとも言える。結局のところ、僕が何も覚えていないのだから、どっちとも言えない。

果ての湿原。この場所へ辿りついた人は、何かが欠けている。どうもそうらしい。彼女は涙。僕は記憶。獣医は、何だろう。表情だろうか。

「でもいつか、泣けるのかもしれないわね。泣きたいと思えたら」

「そうなんですか」

「ええ、多分。泣きたくないと思った想いが癒えたら、ね。きっと」

「想いは、癒えるんですか」

「ええ、いつかね。だってここは、果ての湿原だもの」

そう言っただけで彼女は美しく微笑んだ。根拠も何もない答えだった。

だけど、その微笑みは店に入ってから今まで、彼女が見せて来た微笑みの中で唯一本物に見えたから、まあいいか、と思った。

## 山羊と少年

今日も当てもなくぶらぶらと歩いていると、小島のような陸地を見つけた。

濃い緑の短い草に覆われている。苔、だろうか。歩いてみると、軽い反発を足裏に感じる。弾力性があり、乾いている地面だった。果ての湿原へ来てからというもの、歩くのは湿った木の板ばかりだったから、なんだか新鮮だった。

少し進むと、直ぐに端が見えてきた。それと共に、靄の向こうに人影も見えてくる。

近づいてみるとその人影は、すぐに僕に気付いた。

「やあ」

少年だった。沼地のほとりに腰掛け、こちらを見て微笑んで来る。

「こんにちは」

僕も挨拶を返す。

「新入りさん、だよな。ここ、一緒に座らない？」

気さくに声をかけて来る少年。柔らかそうな金色の巻き毛に、紺碧の瞳。とても端整な顔立ちをしていた。華奢な体つきと合わせてみれば、少女と言われても信じてしまっただろう。

断る理由もないため、僕は少年の隣に腰をかけた。

「ここで同じくらいの歳の人には初めて会ったよ」

「そうですか」

「うん。ここは大人の人が多いよ。八歳くらいの女の子なら一人知ってるけど。くるくる回って、いつも歌ってるんだ。可愛いよ」

その様子を思い出したのか、少年はふふ、と微笑んだ。眼を細めて笑うと、下がった目尻の傍にある白い傷跡が、少し引き攣れた。よくよく見ると、少年には至る所に傷跡があった。白いシャツの襟元から覗く鎖骨から、半袖からでる白い腕にかけては、薄紅の火傷



跡。前髪のかかった瞼の上にも、細い傷跡。その他にも小さな切り傷の痕や、打撲痕などが散っていた。斑に染め上げられた布みたいだった。

「ああ、これ。気持ち悪いよね」

僕の視線に気付いたのか、少年が申し訳なさそうに言う。

「隠した方が良いかなっても思うんだけど。ほらここ、湿気がすごいから。長袖、着たくないんだよね」

「確かに」

「だよ。君も半袖だもんね」

「そうですね」

少年が抱えていた足を伸ばし、そつと水に足を付ける。気付かなかったが、裸足だったようだ。

「ここに居る人はさ。皆嫌なものを置いて来てるのに。僕はこれ、置いて来なかったみたいなんだよね。要らないのに」

傷跡の一つを指差し、少年が言った。足の指のいくつか、奇妙な方向に折れ曲がっていた。

「君は何を置いて来たの？」

「記憶、みたいですね」

別に隠し立てすることでもなかったため、僕は素直に答えた。

「へえ。良いな」

それはお世辞でも社交辞令でもなく、少年の本心であるように聞こえた。

「僕が置いて来たのはね」

少年が何かを言いかけ、止めた。視線が僕から、僕の向こう側を向いている。

「丁度良かった。おいで」

そして僕がやって来た方向に向かって声をかける。

メエ、という返事が聞こえた。同時にチリンという軽い鈴の音。

「この子、いつもお世話になってるんだ」

少年に紹介されたのは、山羊だった。ただの山羊。白い毛並みに

曲がった角。首には金色の鈴を付けている。

「山羊、ですか」

「そう、山羊」

そう言つて、ポケットから何かを取り出す。小型の折り畳みナイフだった。

「見ててね」

そう言うや否や、少年は突然自分の左腕にナイフを突き刺した。さすがに少し驚く。

刃の三分の一が、少年の腕に埋まっている。程なくして肉と金属の結合部から、じわりと赤い血が滲み出て来る。出立ての血の色は濃い。だが刃が傷口に埋まっているおかげで、それ程出血はしていなかった。ナイフも傷も、本物のようだ。

「それで」

「うん」

「何が」

「どうしたって？」

「はい」

腕にナイフを刺して、何がどうしたと言つのか。少年は僕の言いたいことを、僕がはつきりと言つ前に察してくれた。こう言つのはとても助かる。

「痛くないんだ」

「はあ」

「僕が置いて来たのはね、これみたい」

「痛み、ですか」

「そう、いろんな痛み」

にこりと微笑んで、ずぼりとナイフと腕から抜く。刃によって堰き止められていた血が、溢れだす。

「でも、血は出るんですね」

「そう。ただ痛くないだけだから。血は出るし、傷も残る」

ナイフを地面に置き、右手で山羊の首輪を持ち、引き寄せる。

「だからね、この子に頼る」

そう言って、どくどくと血が流れる左腕で、山羊をそつとひと撫でする。

すると、ついさっきまで生々しく開いていた傷跡が、綺麗さっぱり無くなっていた。ほんの一瞬、瞬きの時間の出来事。何事もなかったように、そこには斑色の肌だけがあった。

「ね。消えたでしょ？」

まさに消えたと言う表現が相応しかった。じつと傷の消えた部分を見ていると、再び山羊がメエと一声鳴いた。

見ると、山羊の四肢の内の一つ、左前脚から赤い血が流れていた。傷口からじわりと滲み出た血が、白い毛に染み込んでいく。

「この子が身代りになってくれたからね」

少年は再びズボンのポケットから何かを取り出した。包帯だ。

「いつもこの子に代わって貰ってるんだ」

山羊の足に包帯を巻きながら、少年が言う。

「いつも、ですか」

「そう、いつも。この子を撫でると傷が移る。だから心おきなく確かめられるんだ」

「何を」

「確かめるのかって？」

「はい」

またしても言葉を取られられる。察しが良い。いや、この場合は妥当な流れか。

「まだ痛くないのかってことを、だよ」

「なるほど」

「だから、こうやっていつも確かめてみるんだ。傷が残るのは嫌だから、傷だけはこの子にあげる」

少年は山羊を愛おしげに撫でる。メエ、と鳴く山羊。その声は至って穏やかで、傷を受けた事による苦痛など感じていないようだった。

「いつも確かめてる。でもやっぱり、何も感じないんだ」

「感じたいんですか、痛みを」

少年の言い方は、まさにそうとでも言いたいような感じだった。果ての湿原に来る者は、何かが欠けている。その何かは、自らの意思とは関係なく、無くなる。しかし何かは自らが保持することを望んでいないもの、みたいだ。

だから、少年の言葉と行動は、少し奇異なものに思えた。少なくともこの場所に居る者としては。

「さあ、どうだろうね」

ナイフの刃を折り畳み、ポケットにしまい、

「痛いのは嫌いだよ。辛いし、苦しいし」

両手を後ろに付いた。隣には山羊が寄り添っている。

「だけどね、不便なこともあるんだよ。色々と」

「色々、ですか」

「そう。色々。例えばね」

と、少年が言うや否や、肩口辺りにどんつ、と鈍い衝撃を感じた。その次の瞬間には、四つん這いになって、体半分を沼に突っ込んでいた。

「……………」

突然過ぎて、一瞬頭の中が空白になる。

「……蹴りました、よね」

「うん、蹴ったよ」

自分の判断に少し自信がなかったが、直ぐに少年が肯定してくれた。

「何で、とか訊かないの？」

「はあ。何ですか」

沼から起き上がりながら、訊いてみる。沼は浅く、水もきれいだったから、特に汚れてはいない。髪と顔と腕と服が濡れたくらいだった。

「うーん。何か君の反応、拍子抜けしちゃうな。怒ったり泣いたり

痛がつたりしないの？」

「はあ。まあ、驚きはしましたけど」

手で顔を拭いても、前髪からポタポタと水が垂れて来る。眼に入るため、左手でかきあげた。

「そっか。でもこれじゃあ、痛むものも痛まないかな」

「何がですか」

「良心」

少年は全く悪びれた様子もなく、けろりと答える。

「ああ、なるほど。だから蹴ったんですか」

「そう。だから蹴ったんだ」

理由が解り、すつきりする。僕はまた少年の隣へ腰掛けた。

「何かと厄介なんだよね。君、昔誰かに言われなかった？ 人の痛みが解る子になりなさいって」

「さあ。あるかも知れないし、ないかも知れません」

「ああ、そっか。記憶がないんだったよね」

少年は裸足の足を投げ出す。

「僕は痛覚が欠けてるから、何も感じない。何を見ても、聞いても、しても、心が痛まない。だから、たまに人を泣かせちゃったり、怒らせちゃったりする。別にやりたくてやってるわけじゃないんだけど」

「それは、不便ですね」

「そう、不便。僕は人を傷つけない訳じゃない」

僕は山羊をちらりと見た。少年に撫でられながら、山羊は気持ち良さそうに眼を閉じていた。

「だから、要らないものでも、あればあるで困るけど、なければ無いで困るんだよね」

「そうみたいです」

「うん」

暫しの沈黙。ふいに生温かい風が吹き、濡れた僕の上半身を撫でていった。あまり気持ち良くはなかった。

「突然蹴っちゃって、悪かったよ」

徐に少年が言う。

「本当にそう思ってますか」

僕は訊く。

「いや、実はあんまり」

少年はにこりと笑った。美しく、無邪気に。見た事は無いけど、天使の微笑みというのは、こんな笑顔のことを言うのかもしれないな、なんて思った。

## 少女と蝶々

僕が果ての湿原に来てから、何日かが経過した、

灰色の曇天に、半透明な白い靄のせいで、この場所には変化がないように見える。しかし夜は来るし、朝も来る。靄が薄い夜は、よくよく眼を凝らしてれば物凄く霞んだ朧月のようなものも見える。果ての湿原にもきちんと一日が存在するのだ。

日数を数えるのを忘れていたため、具体的な経過日数はわからないけど、多分二週間ぐらい経った頃。時刻は多分昼頃。僕は既に日課と化した散歩をしていた。好き好んで行っていると言うよりは、それしかすることがないと言う方が正しいけど。

果ての湿原の住人は愛想が良かったり悪かったり、友好的だったりそうでなかったり、無関心だったり好奇心丸出しだったり、ギヤップが激しい。唯一中庸的だったのは、最初に会った獣医くらいだ。ゴールドフィッシュの店主の女性はとても愛想が良かったし、山羊と仲が良い傷跡だらけの少年はとても友好的だった。それ以降会った人はそうはいかなかった。丸無視されたり、唾を吐きかけられたり、無言でじっと睨みつけられたり、いきなり罵詈雑言を浴びせられたこともある。突然無遠慮に質問攻めにされたこともあった。色々な人が居るのだなと思った。

今日はどんな人に会うだろう。そう思っていると、前方に一本に木が立っているのが見えてきた。

枯れた茶色の葉に白い樹皮。白樺だった。

陸地に一本、すくっと立っている。その根元辺りに、くるくると回っている黒いものが見えた。

近づくに連れて、小さな歌声も聞こえて来る。

枯れた白樺の傍で、歌いながらくるくると回っている黒いもの。それは一人の小さな女の子だった。

「こんにちは」

僕は声をかけてみる。

こちらを背にして、ぴたりとステップが止む。そして女の子が振り向く。

「あら、おきゃくさんね」

と言つて、にっこりと笑った。

さらさらとした長い銀髪に、大きな宝石のような緑の瞳。そして黒一色のワンピース。とても愛らしい少女だった。

お客さん。どう言つた意味を含んだ言葉なのだろうか。僕が考えていると、続けて女の子が言う。

「おちゃかいはもうすぐよ。ちよつとまっててね」

スカートの裾を摘んで、お淑やかにお辞儀をしてみせる女の子。そして再び軽やかにステップを踏みながら躍り出した。

これは、一体どのような状況なのだろうか。僕は思案する。

女の子は躍っている、歌いながら。だが彼女は言っていた。これからお茶会が始まると。その口ぶりから、彼女がお茶会の主人であるようだ。この場所であるのだろうか。というか、お茶会とはその文字通りの意味合いなのだろうか。もしかしたら比喻か何かかもしれない。ここの住人の言葉もまた額面通りだったり、意味が不透明だったりと差が大きいのだ。そんなことを考えていると、ふと頭上で何かがひらひらと舞っているのが眼に入った。

何だろつ。よくよく眼を凝らして見ると、それは徐々に輪郭を現して来る。

真つ白な蝶。気を抜いてしまうと、そのまま灰色の空に溶けてしまいそうに見える蝶が数匹、白樺の周りを舞っていた。女の子のタインに合わせるように、ひらひらと優しく空を泳いでいる。さらさらと流れる銀髪と、ふわりと風に舞う黒のスカート。そして共に舞う白い蝶。その風景を見ていると、何だか夢を見ているような気分になつて来た。

「さあ、みんなそろつたわ。おちゃかいをはじめましょう」



ぼうつとしていると、女の子の声に眼の焦点が戻る。

皆揃ったって、誰が。と思っていると、いつの間にかに眼の間には丸い硝子のテーブルが一つと、椅子が四つ出現していた。四つの椅子の内の二つは既に埋まっていた。二人の大人の男女。二人とも女の子と同じく銀髪に緑色の瞳をしていた。

「おにいさんもすわって」

一体いつ現れたのか。首を傾げていると女の子が僕の腕を引っ張る。促されるままに僕は空いている一つの席に座った。

「さあ、どうぞ」

どこから持ってきたのか、テーブルの上には陶器のティーセットが置いてあった。花の絵が描かれたティーカップを女の子が差し出して来る。

「どうも」

僕は受け取り、ひとまずテーブルの上に置いた。

女の子は同じように、僕の正面と隣に座る男女にカップを配っていた。

微笑んでいる二人をじつと見つめる。女性の方は、長い銀髪に、ほっそりとした顎。薄紅の頬。とても綺麗な女性だ。なんとなく面影が女の子に似ているような気がした。男性の方は、柔らかそうな銀髪を短く刈り、精悍な顔つき。細身ではあったが、肩はがっちりとしており、服の上からでも体にバランスよく筋肉がついているだろうことがわかった。そして二人とも女の子と同じく黒い服を着ていた。

「おにいさんはどこからきたの？」

ティーカップを配り終わった女の子が訊ねて来る。両手指を交叉させて、その上にちょこんと顎を乗つけて、少し首を傾げながら。

「さあ、取り敢えず外からですね」

カップの中身をじつとみつめながら僕は答えた。

「そと？ そとってどこかしら。あっち？ そっち？ それともこっち？」

女の子はくるくと四方に視線を彷徨わせながら、歌うように言う。

「今日はあっちから来ました」

僕はその内の一つ、今日歩いて来た渡り橋を指差した。

「そう、あっちからきたのね」

うふふ、と女ここが笑う。正面と隣の二人は相変わらず穏やかに微笑んでいた。

「わたしはそっちからよ」

女の子は僕がこれから向かう予定だった方向を指さす。

「それでね、よるになるまでわたしたちはずっとここにいるの」

「わたしたち？」

「そう、わたしたち。わたしと、おかあさんと、おとうさん」

女の子の言葉に、やっぱりこの二人は女の子の両親なのだなど合点する。道理で似ている訳だ。

「おひるのあとは、いつもここでおちゃかいをするの。おかあさんのこうちゃはとてもおいしいのよ」

そう言って花柄のカップを愛おしげに両手で包み、

「とてもいいかおりでしょう？ ミルクをいれてもおいしいんだけど、なにもいれないほうがこうちゃそのものあじをたのしめるのよ」

なんておしゃまに言う。

「……そうなんですか」

僕はそれだけ言って、女の子のようにカップを両手で包んでみる。ひんやりとしていた。

「おさとうもいれないほうがいいのよ。おかしといっしょにね、いただくから。おとうさんはね、おかしづくりがとくいなのよ」

「お菓子作り、ですか」

「そうよ。おとうさんはね、とってもつよいの。でもね、おうちにいるときは、おかあさんとわたしに、おかしをやいてくれるのよ」

柔和に微笑む男性を見る。カップの取っ手を握んだ手は、大きく

て骨ばっていて武骨な感じがした。これがお菓子作りが得意な手、らしい。

「そのクッキーもおとうさんのてづくりよ。こうちゃといっしょにめしあがってね」

女の子がテーブルの中央辺りを指差す。

「……はあ」

僕は曖昧に頷く。

すると、女の子はにこっと顔全体で笑い、突然すくっと椅子から立ち上がる。

「そろそろゆうがたね。きょうのおちやかいはこれでおしまいよ」

女の子がそう言うや否や、僕は急に支えを失った。

おや、とも、あれ、とも疑問に思う暇もなく、どすん、と地面に尻もちをつく。

瞬きの時間の間に、透明な椅子とテーブル、花柄のティーセット。そして穏やかな微笑みを浮かべた女の子の両親は跡形もなく消えていた。

間抜けに尻と両手を地面につき、一人残った女の子を見上げる。

「おはなしができてたのしかったわ、おにいさん。またこんど、おちやかいでね」

ごきげんよう、と再びスカートの裾を摘んでお辞儀をする女の子。そして何か歌を口ずさみながら、スキップで僕が来た逆方向の道へと去って行ってしまった。

僕の頭上ではいつの間にか、また白い蝶が数匹、ひらひらと舞っていた。

今の現象は、お茶会とは、一体何だったのだろうか。そう思いながら優雅に舞う蝶を見つめていると、チリン、と聞き覚えのある鈴の音が耳に触れた。

柔らかい地面に座ったまま首だけで振り向くと、そこにはこれまで見えのある山羊と、金髪の少年が立っていた。

「あれ、今日のお茶会は終わっちゃった？」

害のなさそうな笑みを作って言う、少年の第一声。

「ついさっき、終わったみたいですよ」

「そっか。もう夕方だもんね」

ああ、と納得すると少年は僕の目の前にしゃがんだ。

「それで、どうだった？ 彼女のお茶会は」

その口ぶりから、少年はあのお茶会に出席したことがあるのだろ  
うなと思った。

「なんだか夢みたいでしたよ」

僕は率直に、頭に浮かんだ感想を伝えた。

夢のよう。声に出してみると、女の子のお茶会はまさにその形容  
がぴったりだと感じた。

先程まで言葉を交わしていた女の子。会話というよりは、女の子  
が言う一方的なことに相槌を打つくらいだったけど。彼女は確かに  
存在していた。

しかし彼女の言う《お茶会》は、実に奇妙なものだった。

「うん、わかるよ」

うんうん、と頷く少年。

「彼女の両親には会った？」

「はあ、まあ……」

「じゃあ、聞いたよね。紅茶を淹れるのが上手なお母さんと、お菓  
子作りが得意な強いお父さんの話」

「そうですね。聞きました」

「それじゃあ、紅茶、飲んだ？」

「……いいえ」

「クッキーは？」

「それも」

「だよ」

あはは、と声に出して笑う少年。

「飲めないし、食べれないよね」

「……そうですね」

「だって、無いんだもんね、どこにも」

そう。少年の言う通り、紅茶もクッキーも何処にも存在していなかった。

渡されたティーカップの中身は空で、女の子の指差した場所にはクッキーも何もなかったのだ。

「でもあの子には見えてるんだよ」

「みたいでしたね」

女の子は嘘をついている風でもなかったし、僕を騙して楽しんでいる風にも見えなかった。だから、彼女は本気で全てが在るように見えていたのと思う。本気でお茶会を楽しみ、客をもてなしていたのだろう。

「あの子がお終いっていうと、全部消えちゃうんだ、いつも」

「ついさっき体験しました」

「ああ、だからこんなとこに座ってたんだね」

少年がまた笑い、今度は山羊も一緒にメエと鳴いた。

「最初は僕もそうだったよ」

「そうなんですか」

「うん。最初はびっくりしたけど、なんか病み付きになっちゃうんだよね。彼女のお茶会。一瞬だけど、夢みたいなふわふわしてて。心許ないんだけど、心配することも何もないって言う。なんか、安心できる時間を味わえるんだ」

穏やかな優しい口調で少年が言う。

その感覚は僕もわかるような気がした。

奇妙なお茶会の間、彼女は常に微笑みを絶やさなかった。楽しげに僕をもてなし、誇らしげに両親のことを語った。その様子は、そう、幸せそうだった。おそらく彼女にとって、お茶会は幸福の時間なのだろう。違和感はあるが、そんな女の子の様子を見ると、僕もその時間を共有できるような気分になえた。

「きつとあの子にとって、あれは幸せの時なんだね」

僕が思っていたことと同じことを、少年も言った。

「あの子はこの枯れた白樺の木の下で、いつもお茶会を開いているんだよ」

周囲をひらひらと白い蝶が舞う一本の白樺の木を、少年と共に見上げる。

「彼女が置いてきたものは、何だったんでしょうね」

なんとなく僕が言うと、

「さあ。でもあの子が此処で幸せを感じているなら、別に何でもいいんじゃないかな」

と少年が答えた。

確かに、彼女にとって置いて来たものはどうでも良いものだったのかも知れない。一日に一度、両親と共にお茶会を楽しむ。そんな幸福なひと時を過ごせる彼女が、少し羨ましい。それが儚い幻だとしても。

果ての湿原に来て幾日か経った今日。僕は初めて、そんな羨望を感じた。

## 僕と金糸雀

世界の果てというのはどこか寂しげで、それでいて優しい。

ぶらぶらと歩いては、なにを考へるでもなくほとんど色の無い景色を眺める。時折入口付近に赴いては、獣医の新しい花を見物する。ゴールドフィッシュを訪れては、銀髪の女性と語らいながら、涙を流してみる。山羊を連れた少年と会っては、他愛のないお喋りをする。相変わらず突然蹴飛ばされたりもする。緑の瞳の女の子のお茶会に参加しては、幻想の幸せに浸る。

僕の果ての湿原での、そんな緩慢な日常。特に何の変化もなく、ただ過ぎ去っていく日常。それはとても心地よく、また少々虚しくもあった。

今日僕は誰とも会うでもなく湿原の小島に一人座り、靄にぼかされた風景を、ぼんやりと眺めていた。

ぬるま湯のような温度の湿った空気。ぼーっとしていると、眠気を誘う。このまま寝転がり、昼寝でもしようかと考えていた時、僕の目の前に一羽の小鳥が舞い降りた。そして小鳥は、片方だけ立てていた膝の上にちょこんと飛び乗って来る。

ほっそりとした体に、金色の羽毛。綺麗な声で一声鳴く。金糸雀<sup>かなりあ</sup>だった。

「こんにちは」

僕は話しかける。小首を傾げるカナリア。そして、

「こんにちは」

と言った。澄んだ美しい声だった。

おや、と思う。カナリアは喋る鳥だったろうか、と考へるが、それは鸚鵡<sup>おつむ</sup>だったかもしれないと思ひ当たる。

「初めまして」

再びカナリアが美しい声で言う。

「初めまして」

僕もそう言葉を返した。

「驚かない？」

カナリアがまた小首を傾げながら訊ねて来る。

「まあ、少しは」

本音だった。しかし、ここは果ての湿原だ。特段驚き慌てふためくような出来事でもない。それどころか、この愛らしく綺麗な声で鳴くカナリアと話す事が出来る、ということを楽しそうに思う。

「淡泊だね」

「僕が、ですか」

カナリアの目の前には僕しかないわけだが、取り敢えず訊いてみる。

「うん、そう見えるよ」

「そうですか」

自分ではよくわからないが、カナリアがそう言うのなら、そうなのだろう。他の人に言われたことは無かったが。

「今日は、何をしていたの？」

「何も」

「何も？」

「はい。何もせず、ぼうつとしていました」

これでは何も、ではなく、ぼんやりしていたことが何か、に当たるかな、とも思いつながらそう答えた。

「それは、面白い？」

「面白いが面白くないかと言うと、面白くはないですけど」

「じゃあ、何でそうしているの？」

「さあ。なんとなく、ですかね。特にやることもないですし」

ここに来て、ここでの生活に慣れてしまっただけから、あまり物事を深く考えることをしなくなっていた。何かをやるうにも、何も思いつかない。こう言う時、僕はどうしていただろうと考えてみたが、記憶がないので思い出しようもない。だからいつもなんとなく、ぶらぶらと散歩をし、誰かと出会い、会話をする。それ以外はこうや



ってぼんやりとする。その繰り返し、何の意味も理由もなかった。  
「自分が何をすればいいのか、わからないんだね」

「はあ。まあ、そうかも知れませんか」

確かにカナリアの言う事もまた、正しい。僕はここで自分が何をすればいいのかわからないから、こうやってなんとなく緩慢に日々を過ごしている。

「やっぱりね」

「やっぱり？」

「うん。他の皆は、それぞれに好きに、自分のやりたいことを、やるべきことをやってる。だけど近頃の君は、そうは見えなかった。少なくともぼくにはね。だから、来たんだよ」

「はあ、そうなんですか」

何だかよくわからないことを言うカナリアだった。僕が無意味に日常をやり過ごしているから来た、と言う。それは一体、どういう意味なのだろうか。

「そうだよ。ぼくはこの湿原での出来事なら、何でも知っているんだ。勿論、君のことも。君がここへきてからのことも、ここへ来る前のことも、全部ね」

「と言うと」

「うん。君の置いて来た記憶も。勿論知っているよ」

ふわりと、生温かい風が肌を撫でた。その感覚に、何故か肌が粟立つ。カナリアの頭のふわふわとした毛も、小さく揺れていた。

「今度は、驚いた？」

「そうですね。驚きました」

これも本音だった。両掌で包み込んでしまえそうなほどに小さなカナリアが、全てを知っているなんて。

「すごいですね」

「すごくないよ。ぼくが知ってるのは、果ての湿原のことと、果ての湿原のみんなのことだけだよ」

それだけでも十分すごいことだと僕は思った。なんせ僕は、僕自

身の事さえよく知らないのだから。

「君の置いて来たものこと、知りたくない？」

カナリアが、小さくて真ん丸な黒い瞳を輝かせながら、唐突に訊いて来る。好奇心に満ちている、そんな眼だった。

「さあ、別にどちらでも良いですね。正直」

「どうして？」

今度はカナリアが驚いたように言う。

「必要だったら思い出す、必要では無かったら思い出さない。それでいいんじゃないかと、近頃思っただけです。なので、僕が置いて来たもの。それが僕に話す必要があるとあなたが思うのなら、それでいいですし、そうでないなら、それでもいいんです。多分どちらにしても、必然なのだと思いますから」

僕は果ての湿原に来てから、僕の置いて来たものに対して考えていたことを、正直カナリアに話した。わからなくてどうしようもないそれならば、成り行きに任せればいい。なるようになるだろう。そんな感じ。もしかしたら今、この地に来てから、一番長く喋ったかも知れない。

「そうなの？ でもそんなことを言われたら、ぼくは話せなくなっちゃうよ」

「何ですか？」

「だって、ここは果ての湿原だもの」

カナリアの答えは、簡潔でいて複雑だった。

「それは、何だか哲学的ですね」

「そう？ 事実だよ。ここは在るべくして在る場所だけど、住人が望まずして存在することは出来ないんだよ」

「そういうものなんですか」

「そうだよ。みんな、ここに望んでやって来るんだ。始まりと、終わりと求めて。疲れた足を休めに。君も、そうだったろう？」

そう言われてみると、そんな気もして来る。

僕が旅を始めたのが、いつだったのか、何故だったのかは全然思

い出せない。でも、果ての湿原に足を踏み入れた時、僕はこの旅が一つの終わりを迎えたのだと、感じた。ただの直感だったけど。そう感じたんだ。

「でもね、君を見ていて、思ったんだ。そろそろまた、君は歩き出す時期に來たのかなって」

そう言うってから、カナリアは美しい声で一声鳴く。風に運ばれて、水の匂いが鼻を掠めた。もうすっかり慣れ親しんだ、この匂い。これを嗅ぐと、何か胸の奥でざわざわとしているものが、すっと落ち付く。水辺をじっと見つめていると、段々心の中が空になっていく。その感覚は、とても楽だった。何かを思い出そうとしている自分を、忘れられた。

でもそれは、今までの話。

近頃では、そんな優しい忘却を心地よいと思う一方で、何だかどうしようもない心許なさも感じていた。水の匂いは、それを僕に思い出させる。僕が置いて來たものに対する、焦燥を。

「みんなも、思い思いに歩き出す時を探していたよね。気付いていたかい？」

僕は答えずに、少し考えてみた。

笑顔を手放した、花を咲かせる獣医。涙を捨てて、金魚の涙を売る女性。痛みを失くしてなお、それを感じようと自らを傷つける少年。現実から目を逸らし、お茶会で幻想に浸り続ける少女。彼らは皆、形は違えど、置いて來たものに対して向き合っていたような気がする。

「ね？　終わりと始まりを求めて、みんな探してる。それが無意識の行動でもね。でも、君だけがそれに気付かずにいるんじゃないかって、思ったんだよ、ぼく」

カナリアが可愛らしく言う。

「だから、來たんですよね」

「そうだよ。ぼくは全部知ってるからね」

今度は少し得意げに答える。

僕は忘れてしまった記憶について、思い出すも思い出さないも、どちらでも良いと考えていた。先程カナリアに言った通り、どちらも自然に喚起されるものであり、それは必然だと思っていたから。でも、もしかしたらそれは少し違うのかもしれない。思い出さなかったのは必然ではなく、僕がそう望んでいなかったからなのか。

「僕は、何故記憶を置いて来たんでしょね」

考えていると、そんな疑問が口を突いて出てきていた。

「それを知りたいと、君は望むの？」

カナリアがじつと僕を見つめる。

「……はい」

少しだけ躊躇してから、僕は頷いた。近頃頻繁に襲ってくる、微かな空虚感。それを埋めたいと、無意識に思っただのかも知れない。僕が何故ここに来たのかだけでも、知りたいと思った。

「それじゃあ、教えるね」

「はい」

「それはね、君が幸せだったからだよ」

嬉しそうに、歌うようにカナリアが言った。

一瞬、その言葉の意味がわからなくて、言葉に詰まる。

「……幸せだったから、ですか」

「そうだよ。幸せだったんだよ、君は」

そうだったのだろうか。僕は幸せだったから、その記憶を置いて、果ての湿原へ来た、ということか。何だか胸の奥にすんと落ちて来るものがあるが、まだはつきりとは理解できない。

「でもね、それが失くなっちゃったから、君はその《幸せの記憶》を置いて、ここに来たんだよ」

続けてカナリアが言う。

ああ、そういうことか。

空っぽだった部分に、何かがぴたりと嵌まる。

はつきりとは皆に訊いたことはなかった。だが皆、置いて来たものに対してそれを要らないもの、や必要ないもの、と言っていた。

だから手放したかったんだ、と。でもこうも言っていた。あればあるで困るけど、ないなら困るね、と。

そんなものか、と僕はただ漠然と思っていた。在ったときの感覚は覚えていなかったけど、無い時の感覚だけは知っていたから。

「だから、僕は望んでここへ来た」

「うん。そういうこと」

カナリアはまた、嬉しそうに囁き、

「それじゃあ君は、これから何を望む？」

そう訊ねて来た。

「僕の望むもの、ですか」

「そう。君は果ての湿原に来て、みんなと会って、何を聞いた？

何を感じた？ それを繋げたものが、きっと君の望むものだよ」

急にそんなことを言われても、少々戸惑ってしまう。なんせ、僕はここへ来た理由をきいばかりだ。心の整理と言うものもある。だけど、なんとなく気付いてもいた。僕はもう、それを見つけているのかもしれない。

カナリアは言った。僕はここではもう、何をすればいいかわかっていないように見えた、と。そしてこうも言った。だから、もうそろそろ歩き出す時期が来ているのではないのかと思った、と。

それは僕が、ここで終わりと始まりを見つけかけている、ということなのではないか。

最初に出会った獣医は言った。ここには色が少ない、だから動物を治療して花を咲かせるのだと。ないものがあれば、あるもので作ればいい。そう言っているように感じた。

ゴールドフィッシュの女性は言った。思いが癒えたらいつか泣ける。いつか涙を流して、思い出にどっぷり浸るのだと。僕は泣けたけど、思い出には浸れなかった。いつか彼女と、思い出と共に泣ける日が来ると良いと思った。

天使のような少年は言った。痛みを感じるのは嫌だけど、ないなら困るのだと。生きている上で痛みを感じないのは、とても

不便なことなのだと、思い知らされた。

黒い蝶と共に舞う少女を見て感じた。たとえ幻想でも、幸福な記憶に包まれるというのは、とても甘美なことなのだと。

皆、迷いながらも何かを望んでいた。この湿原で、彼らなりに何かを探そうとしていた。

だとすれば、僕も無意識の内にそれを探そうとしていたのではないか。

カナリアを見つめる。その黒い瞳は、僕の考えを肯定してくれているように思えた。

ああ、そうか。

黒真珠のような瞳をじっと見つめていると、突然靄が晴れるように、頭の中がクリアになっていった。僕がどの誰で、何をしていた人間なのか、はつきりと認識した。不思議な感覚だった。今思い出された記憶を持つ僕は、これまでの僕と別人のような気がした。

よく笑い、よく泣き、傷付き易い夢見がちな少年。それが僕だった。幸せだった頃の記憶が湧水のように溢れて来る。ああ、あんな楽しいことがあった。こんな辛いことがあった。懐かしい人たちが、もう二度と会えない人たちの顔が浮かんでくる。それら全てが、かけがえのない愛しい僕の過去だった。もう帰れぬ、戻らぬ時間だった。

そしてそれがすべて奪われ、失くした時の事も思い出す。身を引き裂かれるかと思う程の喪失感。それに耐えきれず、僕は逃げ出したのだった。行く当てもなく、何かをするでもなく、歩き続けた。ただひたすらに進み続けても尚、幸せな思い出は僕を苦しめた。いつそ全て忘れてしまえたら、楽なのだろうか。そんなことを思った気がする。

そうやって歩き続けて、気が付いたら僕は全てを忘れ、こうして果ての湿原に辿りついていたと言う訳だ。

「どう？」

カナリアが興奮に輝いた眼差しを送って来る。

「多分、わかったような気がします」

「うんうん、何が？」

「僕の望むもの。それはここには無いんですね」

そう。果ての湿原は始まりの場所であり、終わりの場所。その中間は存在しない。僕の望むものは多分、そこにある。

「僕が望むのはきつと、それを探すことなんだと思います」

「うんうん、そっか。それじゃあ、行くんだね」

朗らかにカナリアが言う。

「はい」

僕は終わりを求めて、ここへ来た。記憶を欠き、過去をないものとし、ただゆるやかに流れる日常に身を任せる。そんな終わりを。でも、その日々の中で始まりを見つけてしまった。何かを要らないと思いつつも、何かを望もうとしてしまう。生きて行く意思がある限り、それからは逃れることが出来ない。それを知ってしまった。だから、ここにはもういる必要はない。

「果ての湿原は始まりと終わりの場所。だから、君がここへ来たいと望めば、いつでも戻って来て良いんだ。ぼくはいつでも、ここで待っているよ」

優しくにカナリアが歌う。

じつとりとした空気。濃い水の匂い。灰色の曇天に、乳白色の靄の地味な色合いの風景。

それらはとても物憂げで、閑寂なものだったけど、同時に包みこむような優しさも持ち合わせていた。

「それじゃあ、またいつか」

僕は一言告げ、立ち上がる。

この優しい籠から出て、外の世界へと旅立つ。

それはとても不安で、心細いことだったけど、不思議と怖くは無かった。

終わりと始まりが在る限り、いつでも僕はここへ戻って来られる。それははたして良い事なのか、悪いことなのかは判然としないけど、

取り敢えずはそれだけで、意味がある。意味が在るのなら、それでいい。

そんなことを思いながら、僕はまた、歩き出した。



## 僕と金糸雀（後書き）

「僕と金糸雀」をもって『果ての湿原』、完結となります。

本作品は夢で見た一場所を舞台としています。

個人的に非常に印象に残っていたシーンだったので、あの場所はどこなところなのか、どんな人がいたのか、などを考えている内に小説として書いてみようを思い立ちました。

何も考えずに書き始め、自分が何を書こうとしているのかもわからないまま書き続け、こんな感じになってしまいました。「果ての湿原」という場所を主人公と一緒にふらふらと模索していきました。

この作品の1～3章は震災前に書き始め、暫く何も書けなくなつた後、4・5章を書き足した形となっています。そのために後半は震災の影響を受けた内容になっているような気がします。震災前まではほとんどテーマ性がなかったのですが、震災後は「喪失」「再生」等の要素が盛り込まれたかもしれません。

そのため、連作短編ですがあまりまとまりがないような構成になってしまいました。最後の章なんてネタもアイデアも尽きて、無理矢理にまとめてしまった感があります。

淡々とした意味不明な物語ですが、一言でも感想など頂けると嬉しいです。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4699z/>

---

果ての湿原

2011年12月15日23時11分発行